

生徒にとってはよい時間となっているようだ。

まだ「片づけ」活動が生徒に定着しているわけではないが、「片づけ」には「遊んだ後の片づけ」、洗濯には「水を使う」「機器の操作」など生徒の好きなことにつながっている部分もある。そこから生徒にとって「片づけ」活動が楽しいものとなり、自分から教師に要求したり、積極的に取り組んだりする姿がでてくると思われる。また活動にも見通しをもって自分から取り組めるようになっていくと考えた。私たちはそういう活動を大切にしていかななくてはいけないのではないか、そこから学習が始まると考える。

(今井康弘 岩沼見奈)

## 事例 6 国語・数学「～さわって、あそんで（文字や数字に親しもう）～」

### (1) 生徒の実態

本グループは、1年生1名、2年生1名、3年生3名の計5名の生徒で構成され、週に4コマある時間を3人の教師が担当している。今までも文字や数字については学習してきたが、どの程度理解しているのか評価しにくい面がある。また子どもたちにとっても、生活やコミュニケーションの場に生かせない菌痒さがあるように思われる。

学習課題への取り組みは、すぐに自分から始めることのできる生徒もいれば、しばらく時間を要する生徒もいる。また、課題を早く終えては「次は？」と言う生徒もいれば、1課題を終える度に休憩に入る生徒など、5人5通りのペースやプロセス、アプローチが必要な子どもたちの集団である。

### (2) 教材観

文字や数字に慣れ親しむことによって、毎日が楽しくなる。学習意欲にもつながる。そんな経験をどうやって積み上げることができていくか考えたとき、自分の専門分野を生かそうと思った。試行錯誤しながら、いろいろなものを作ってみた。

教材教具として作ったものは、子どもたちにとっては「玩具」であっても良い。目や手を協応させて操作しながら繰り返し「遊ぶ」うちに、自然と文字や数字等を覚えてくれることを願っている。自分で自由に始めて、自分で学び、できたときの喜びや達成感を体験することで、自己評価することもできる。また、置いておくだけで何をすれば良いのかわかるので、ほとんど指示や言葉かけをする必要はなく、騒がしいことの嫌いな生徒のことも配慮できると考えた。

### (3) わかる状況づくり

休み時間、それぞれの場所で過ごした生徒が集まってきて「この教室で何をするのか」見て、すぐにわかってもらえればと、あらかじめ机の上にいろいろな教材を並べておくことにした。ある時は、生徒の名前をわざと未完成のままに並べておくこともある。商標やロゴ文字が好きな生徒には、看板を写真に撮ってきてそれを置いておいたり、前時の授業で時間が足りずにやりかけになっていたものなども準備しておくことにした。教室に来た

生徒から、それぞれのペースでそれぞれの活動を始められるようにしている。また、棚にはいろいろな「玩具」を並べ、関心があるものを自由に取り出しては使えるようにも配慮している。

教材観と同じように、こうした方法に満足できるはずがない。「起立」「礼」に始まり、1つの学習課題が提示され、様々な方法や内容・ねらいはあっても、一斉の授業をする学校の従来の授業とは違った形態をとっていることに、いつも疑問と不安を感じている。

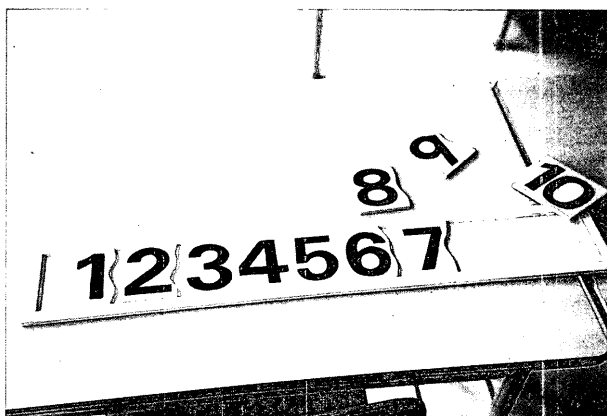
- ・個人個人が勝手に好きなことをやっていて、5人が集まったの学びあう集団（グループ学習）の長所をどう生かすか？
- ・教材が氾濫すぎて、子どもが混乱していないのか？
- ・5人5様の対応をしていて、行為のみを追い掛けることに終始していないか？ など。

しかし、子どもが自分で今日したいことを自分で選び、自分のペースで取り組むことを大切にしたい。また、隣に座る友だちの様子を見て自分もやってみたいと思ったり、気づいたりすることも多いと考えている。

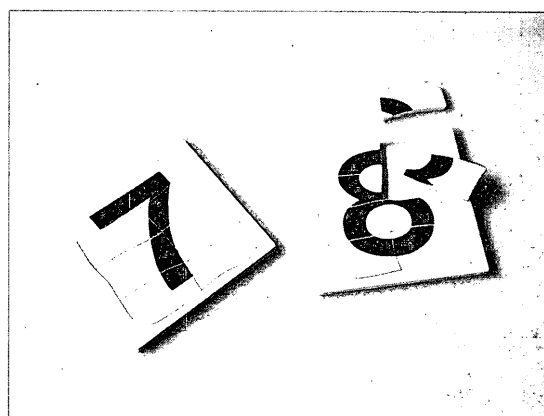
#### （４）指導の実際

##### ①S男の事例

S男は、2～3語文を使って会話を楽しむことができる。ひらがな文字を1文字1文字指差ししながら読むことはできるが、単語として読むことは難しい。担任からは「長い間学習に集中しながら文字や数字への理解を深めてほしい」という要望があった。S男とは昨年の課外活動「ふらっと工房」で、サザエさんの家族を1～10ピースにしたパズルを共に作った経験があり、彼がパズル遊びが大好きであることを知っていた。そこで、パズルを利用して授業を展開できないかと考えてみた。



写真ア



写真イ

（ア～イは、教材カタログを見て模して作ったものである）

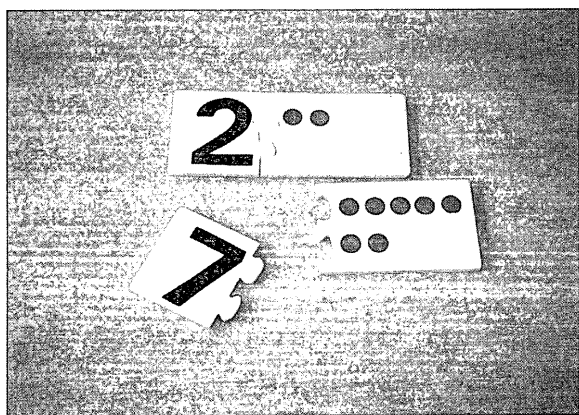
アは、1～10までの数字を並べることをねらいとした教材である。S男は、1列に並んだ数字を難なく仕上げるができる。しかし、ある時、珍しく数字を逆さまにして10から入れようとしたことがあった。「あれ？」と、すぐに訂正の言葉かけをってしまったが、数字を意識して順番に選びながら並べていたのではなく、隣同志の形をヒントに取り組ん

でいたことがわかった。イは、0～10までの数字をその数に合わせて分解してある教材である。1～5ぐらいまでは比較的簡単に数字を意識すれば完成させることができるが、8や9では細くなりすぎて出来上がって初めて数字に親しむことになる。1から順に作り出すと次々とピースが多くなるのが面白いからであろうか、それとも時間をかけて自分なりにじっくり取り組めるからであろうか、S男はこのパズルが特に好きであった。形をヒントに上下左右に方向転換させながら、はまる場所を夢中になって見つけ出していた。

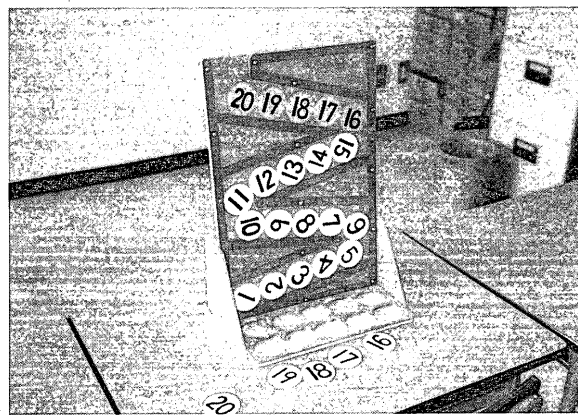
ところがウの教材になると、とたんに混乱している様子が見られた。ウは、左の数字と青シールのドットを合わせないとハマらないパズルである。切り込みの形が似ており、形だけを見て組み合わせることは難しくなる。机の上に左側の1～10の数字と右側の青いドットが一斉に広がってしまうと、ますます見つけ出せなくなるようだった。そこで、S男と一緒に右の青いシールを1つ1つ指を差しながら数え、その数と一方の数字と合わせる活動をくり返した。「わかった！（はまったの意）」という言葉に喜びながら、少しずつ数を増やしていくことができた。

エの教材は、S男のために作ったものではないが、他の生徒がしているのを見て興味をもったようなので提示してみた。左上の口から入れるとコロコロと転がっていく仕組みをはじめは面白がっていたが、数字の並びはバラバラであった。夢中に遊ぶ様子を誉めながら、「次の数字はどれ？」と机の上に並べた数字を確認するよう少し言葉かけをするようにした。文字盤の数字を見て、それと同じ机上の数字チップを選び、入れるとコロコロと転がり合わさっていくのを共に喜び、「できたね！」と励ました。S男は一度できるたびにカードにシールが貼ってもらえるので、同じ教材が繰り返されても苦にならない。連続性があることで、エの教材も自信をもって、成功させることができるようになった。

しかし、このことで、彼が描かれた数字や模様を常に情報として吸収し、いろいろな場面で利用できるようになったわけではない。以後に提供したお金を使った教材（写真オ）では、5円玉と50円玉の区別がつかなかった。同じような大きさで同じような穴が開いているからだ。色や描かれた模様の違いにも気づくよう、彼の様子を見ながら言葉かけをしている。



写真ウ



写真エ

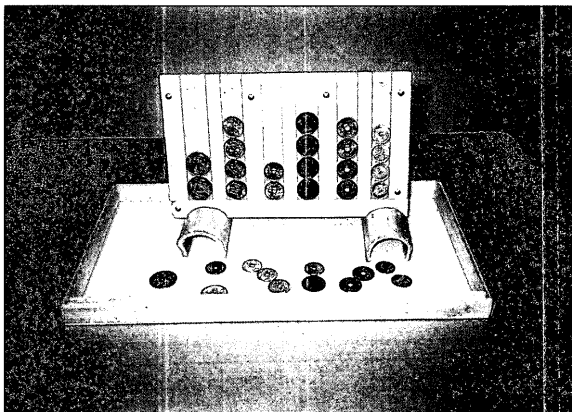
(ウは、教材カタログを見て模して作ったものである)

## ② K男の事例

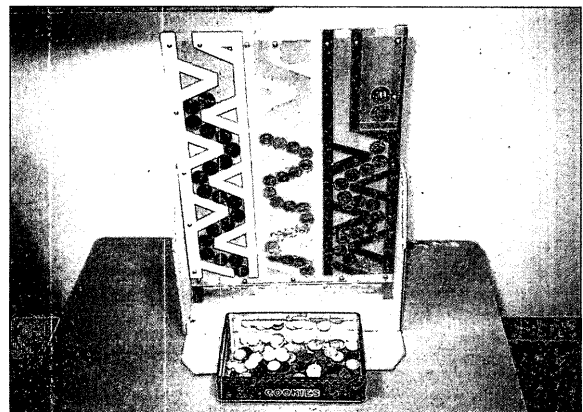
K男は、言われた言葉をすぐに同じ言葉で返したり、了解を求めるような発語が多い生徒である。保護者からは「お金が使えるようになってほしい。」という願いが出されていた。担任からは「ひらがなをしっかりと書く（なぞる）ようになってもらいたい」と、聞いていた。そこで、一番初めの授業でプリントをしてみたが全く興味を示さず、隣のS男の様子に興味を示したので、彼にもパズルを用意することにした。

K男の場合、ア～ウの教材では難しかった。そこで、彼の名前をひらがなで1文字ずつ分割したパズルを作成してみた。自分専用のパズルを手にし、喜んだ彼はすぐに取り組みでいた。次に友だちの写真と名前（漢字）をパズルにした教材を渡してみた。S男もなかなかできない教材をあっという間に仕上げ、難しいだろうと予想していた担任までも驚かせた。何故だろう？まだわからない時期で、単に「もっている力を隠しているのかもしれないね。」という推測であった。

6月のある日、コロコロと転がる様子で遊んでくれればと、エの教材をK男の机に置いてみた。他の生徒の相手をしていたときに、背後で「できた！」と大きな声がした。K男が言った言葉である。教師に伝える声ではなく、自分で感動している声であった。本当にできていた。たまたま居合わせた他の教師も一緒になって喜んだ。次週にもう一度取り組むようにした。一つ一つ、じっくりと睨みながら数字を選び、同じ数字を入り口から入れている。文字盤に描かれた数字と同じ数字のチップが重なり、同じものであることを自分で確認しては、次を探している。できることが嬉しかったのであろう。何度も何度も繰り返して楽しんでいる。その次の週、母親が参観に来た。慎重で時間がかかったが、見事にやってのけた。心なしか、この頃から学習全般に積極性が見られるように感じるようになった。



写真オ



写真カ

しかし、このことで1～20の数字がわかるようになったのではない。アの教材の1～10を並べるパズルでは、まだまだ難しいことが多い。ただ、上に同じ数字が書いてあれば、すぐにでもできるであろう。彼にとっての視覚情報は、まず模様や色であり、S男の場合とは明らかに違うと思える。その後のお金を使った教材（写真オ）でも、しっかりと5円玉と50円玉を見分けている。

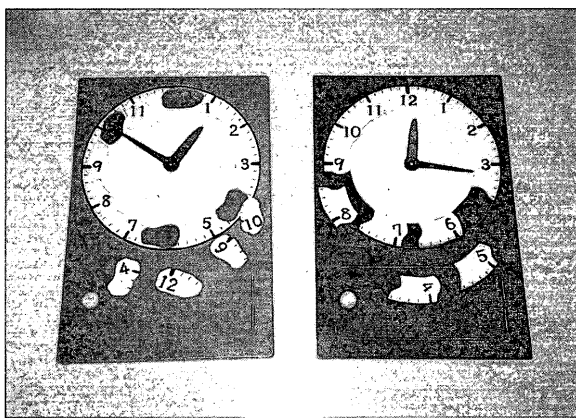
ある日、エの教材を「ん！」と言いながら一生懸命にひっくり返そうとしていることが

あった。「どうしたの?」と聞くと、また「ん」と言って差し出して見せてくれた。今まで夢中になっているものには手を出さないでくれという様子を見せていた彼が、間違いに気づき応援を求めてくれたのだ。僅かな関係であるが、嬉しさのあまりに「こうすると出てくるよ」と慌てて応えてしまったのだが、ここではもう少し待つ必要性を感じた。

#### (5) 考察

生徒の実態を考えると「～ができる。～ができない。」といった観点での評価ばかりをしてきた。今年度の研究を進めるときに、同僚たちと「子どもがどんな見方をし、どんな気づき方で、何を情報として活動しているのかを見よう!」と話し合われた。無駄な言葉かけは、情報を混乱させることもある。ただでさえ言葉数の多い自分である。指示語を一切使わず、言葉かけもできるだけ我慢し、子どもたちの様子をじっくり観察するように心がけた。そのことで、S男とK男の違いを見つけることができた。

その後、時計の形をした教材を二人のことを考えながら2種類作った。1つは、時計の文字盤を数字ごとに形を変えたパズルにし、S男が取り組みやすいものにした。もう1つは、同じような時計の玩具でありながら、パズルのピースの形をあまり変えていない。K男が、もう一方の時計の模様(数字)を見ながら当てはめる活動に親しんでもらえればと願ったものである。この「玩具」が、どれだけ時計への認識を深めるものになるかは、まだわからない。活動の中で、子どもと一緒にやって見つけていきたいと思う。(写真キ)



写真キ

(松本賢二)